加納伊都後援会TRAUBENニュースレター

STRUM

シュトゥルム

第 27 号　平成 27 年 3 月 31 日発行

満開の桜を見ていると、「よしっ！４月からまた頑張ろう！！」という気持ちになるのは、日本人だからでしょうか？　明日から新年度が始まり、TRAUBEN は８年目に突入！　　さて、今年の伊都さんは早速、未知の経験をしたようですね。　また一年、楽しい報告ができればと思いますので、新年度もよろしくお願いいたします。

近況報告

インドのサリーショップ

唐辛子だらけのカップ麺

インド市内

２月半ばから３月にかけて２週間、インドとブータンに行ってきました！
ヨーロッパ人は、南アジア、特にインドに魅力を感じる人が多く、自分探しをしに (ガンジス川を見ると自分が見つかるそうです！) 自転車をかついで旅行に行く姿をよく見かけましたが、その旅行の顛末や、TV や小耳に挟むインド話を聞くたびに、私には縁のないところだ、私はガンジス川には落ちていないだろう…！と人ごとのように思っていたので、降って湧いたようなインド行きの話、そして前から一度は行ってみたいと思っていたブータンへ行くことになり、いったいどうなるのだろうかと出発前からドキドキと期待感いっぱい、そして予想とたがわず、驚きに満ちた忘れられない旅となりました。

それでも両国の人々がヴァイオリンの音色に (ほとんどの人がヴァイオリンの生演奏を聴いたことがありませんでした) 感激して、また弾きにきて欲しいと口を揃えてくれたことは、音楽は、ヴァイオリンの音色は、万国共通でパワーがあることを思い知らされ、私自身そのエネルギーに改めて感激を覚えた旅でした。

ブータンの民族楽器

僧侶しか入れないブータン王宮の
中庭で、風に呼ばれて弾く

いろいろなことがありすぎて、何がどうだったのか、未だ消化しきれていない状態ですが、ニューデリーの空港について、指が６本あるドライバーに連れられて、町中に出た途端、道に佇む、寝転ぶ、いったいなにをしているのかわからない人、人、人に溢れかえる街中と、車線のない道路をクラクションを鳴らしながら縦横無尽に走り回る、行き先を知らないドライバーたちの熱気等、圧倒的なカルチャーショックと、毎食のひたすらスパイシーな食事、そして、会う人毎に、ヴァイオリンは儲かるか？と聞かれ、うーんどうかなーと言葉を濁すと、儲からないなら今すぐ楽器を売りなさい！と叱咤激励され、まるで、あらゆる野菜を入れてプレスしたので、いったい何が入っているのかわからなくなってしまった野菜ジュースのような、ひたすら濃厚な国から一転、
風の谷のナウシカの舞台になったというブータンの、飛行機を降りた途端に迫り来る山々と、雲に手が届きそうに空が近く感じられ、ブータンという国名はブータンの言葉で龍の国と言われ、まるでドラゴンの息吹のように吹き抜ける風が、体をさらっていきそうな、自分自身がとても軽くなってし まったような、はかないような、けれど民族衣装を着た人々が、穏やかに幸せを語る、隣の国にも関わらず、インドとブータンその空間の圧倒的な違いに、あらためて世界は広く 混沌としているのだということを肌で感じました。

ロンドンに戻り、慣れ親しんだ空間に安堵したのか、インド土産の下痢に悩まされていましたが、イースターも迫り、ようやく春の気配が漂い始めたロンドンで、教会での演奏予定が詰まっています。

ここ２年続いた東京でのライブコンサート、今年は予定が合わず、日本に戻ることができませんが、夏のコンサートは行いますので、少し異空間を味わえる演奏にできればと思っています。

【伊都】

ブータンの王宮

王宮の城壁にて

いとちゃんの クラシック講座

op.22

ヴァイオリンの起源は様々に言われていますが (ヴァイオリンという楽器は、始めからこの形でイタリアで生まれました。) 多くはアジアが発祥と伝えています。確かにアジアには似たような弦楽器が数多く存在するようです。インドのシタールもその一つ。インド音楽の父と言われ、ビートルズなどにも影響を与えた有名なシタール奏者、ラヴィ・シャ ンカ (ノラ・ジョーンズの父親) の名前は特に有名ですが、インドで一番ポピュラーな楽器はシタールで、今回インド国内線で楽器を機内持ち込みにするのに、スタッフがシタールは OK なんだけど、ヴァイオリンはわからない…と何度も言われ、ヴァイオリンもシタールとあまり変わらないし、弦楽器だし、とシタール との共通点を説明するのに一苦労、最後は無事乗せてくれましたが、何度もシタールなら…と言われ、基準が全てシタールなことに、国民的楽器なことを思い知らされました。
本当はシタールとの共演も予定されていたのですが、シタール奏者がその場に来ないという、まさかの無言ドタキャン (インドでは当たり前のようです)、残念ながら生の音色を聴くことができませんでしたが、シタールの音色は、時空を超える波動を出すのだとか…、道理で、結婚式シーズンで、泊まったホテルで 3 組のカップルが 3 日間続けるセレモニー中も (結婚式は最低 3 日間だそうです。) ひたすらシタールと共に踊りまくっている、ボリウッド (インド映画業界) を地で行くお祭り騒ぎ、そして何かというとシタールと踊りを披露してくれるそのエネルギーの源は、そこにあるのかも！と妙に納得してしまいました。それにしてもインド人の踊り好きには圧倒されます。

またブータンの民族楽器も、日本の琴や琵琶に似た、やはり何か異空間に誘ってくれる音質のもので、もしかしたら弦楽器には不思議な魔力があるのかもしれない…とまた違う方向からヴァイオリンを見直してみようかと思っています。

【伊都】

DVD Classic Collection

作品 No.22 「パガニーニ～愛と狂気のヴァイオリニスト～」

2013 年 ドイツ　　悪魔のヴァイオリニストと呼ばれた男の生涯

あらすじ

1830 年イタリア。才能と卓越した技術を持ちながらも不遇の生活を送っていたパガニーニの元に現れたウルバーニは、彼を有名にしてみせると約束。様々な手段を用いてパガニーニを成功に導くが、彼は相変わらず派手な女性関係やギャンブルに溺れていた。ロンドン公演に呼ばれ、渋々渡英したパガニーニは、指揮者の娘でオペラを勉強中のシャーロットの歌声に魅せられる。

見どころ

主役のデイヴィッド・ギャレットは “21 世紀のパガニーニ ” と呼ばれる演奏家。ジュリアード音楽院でイツァーク・パールマンに師事し、卒業後は「クロスオーバーな楽曲をクラシックの作品のように高いレベルでアレンジすること」を掲げ、世界中でツアーを行っている。この映画は彼自身の企画。演技力よりも彼の演奏と 5 億円のストラディヴァリウスが圧巻だ。

感想

昨年「演奏家泣かせ」と言いながら伊都さんも弾いていた「ヴェニスの謝肉祭」が酒場のシーンで使われている。また、シャーロットが歌うアリアはヴァイオリン協奏曲第４番のモチーフを使って、デイヴィッドと監督が新たに作った曲だそうだが大変美しく、心に残る。このデイヴィッド、映画を見る限りでは、いい男だけどさぞナルシストだろうと思いきや、来日時のＴＶ出演では、ジーンズの似合う人懐っこいおにいさん、という感じでパガニーニのイメージとは真逆だった。

＊DVD は TSUTAYA の店舗でレンタル可能な作品のみをご紹介しています

編集後記　弦楽器の「魔力」の話題が続きました。「悪魔に魂を 売り渡して手に入れた」と恐れられたパガニーニの前代未聞の超絶技法、その噂が元で教会の墓地に入れてもらえなかったとか。スキャンダラスな放蕩生活と言えば、かのモーツァルトも…最期は葬儀の金もなく共同墓地…でしたね。ベートーヴェンもシューマンもラフマニノフも心を病んでましたっけ。天才って大変！／「すぐれた音楽家は、その技能を獲得するために必要な長時間の練習ができるよう遺伝子にプログラムされている」というミシガン大学の研究結果が昨年発表されました。／ 才能＋努力遺伝子ですかー。せめて努力遺伝子だけでも持っていれば…ってそれは今までの人生を振り返れば明白。凡人で幸せです。　〈ゆ〉

発行：加納伊都後援会ＴＲＡＵＢＥＮ
〒231-0835 横浜市中区根岸加曽台 15
TEL ：０４５－６２２－６７８０
FAX：０４５－６２１－６４２３
Email：trauben@itokanoh.com
Homepage： itokanoh.com